

雨

中劇場

作：井上ひさし

演出：栗山民也

出演：市川亀治郎・永作博美／梅沢昌代・たかお鷹・山本龍二・石田圭祐・酒向芳・山西 惇・植本 潤 ほか

企画意図

2010/2011 シーズン後半は、「JAPAN MEETS…」から続く日本の演劇として、現代演劇を語る上で避けては通れない巨頭、井上ひさしの傑作『雨』を上演します。

井上ひさしがおよそ 35 年前、日本から遠く離れたオーストラリア滞在中に一気に書き上げた『雨』。五月舎からこまつ座へと受け継がれた本作は、26 年間に渡り 8 演、計 482 ステージ、そのすべてを木村光一演出により上演を重ねてきた名作中の名作です。その傑作が装いも新たに登場、新国立劇場で、こまつ座で、数々の井上戯曲を時に細やかに時に大胆に演出し、作家とともに名舞台を生み続けてきた栗山民也が、井上ひさし氏から直々の指名を受け、新演出に挑みます。

他人になりすまし大金を手に入れようとする主人公・徳と、彼を取り巻く人々、そして運命の女・おたかとの日々。井上ひさしが紡ぎ出す美しい日本語の数々。しかしその向こう側に見えるのは、ただひたすらに生きる人々の苦しみ、哀しみ、そして喜び。

徳役には歌舞伎のみならず現代演劇での活躍も目覚ましい市川亀治郎、おたか役にはテレビ・映画・舞台などさまざまな作品で鮮烈な印象を残す永作博美を迎え、そのほか梅沢昌代、たかお鷹、山本龍二ら、今や舞台では欠かすことのできない実力派俳優が集結します。

作品

江戸の町、両国橋。古釘やら煙管の雁首などを拾って歩く金物拾いの徳は、ある豪雨の午後、雨宿りに入った橋の下で、新顔の老いた浮浪者から「喜左衛門さまでは……？」と声をかけられた。そんな名前は知らぬと無視を決め込む徳に、勝手に話しかけては勝手に懐かしがるこの老人。

喜左衛門とは、平畠一の器量よし、「紅屋」の娘おたかのもとへ二年前に婿入りした男なのだが、その喜左衛門と自分がまるで生き写し、しかもその男、去年の秋から行方不明になっている。平畠とは紅花で台所を保っている北国の小藩で、「紅屋」とはその平畠で一番の大店のこと。

そりゃ人違いだ、俺はこの橋の下に赤ん坊の時分に捨てられて、物心ついた時にはもう屑拾いだった、と老人に取り合おうとはしない徳だったが、話を聞くうち、徳の脳裏に一つの思案が浮かぶ。

「どうにかしておたかという女を一目見ることはできねえか」

北へ北へと咲きのぼって行く桜の花を追ううちに、とうとう奥州平畠までやって来た徳。しかし、たとえ姿かたちが生き写しの瓜ふたつでも、徳は喜左衛門の事をなにひとつ知らない。その上、江戸から宇都宮、宇都宮から白河、白河から福島、米沢、平畠と北上するうち、言葉（方言）の様子が変わってきたことに戸惑いを隠せない徳。こんな方言では話せない、これでは他人になりすますことなど出来やしない、やっぱり明日の朝には江戸に戻ろう、と諦めかけた丁度その時、徳は村人に見つけられる。

「紅屋の旦那様（さ）ア……」 「喜左衛門様（さ）ア！」

その声を聞き、徳はいまやはっきりと紅屋喜左衛門を演じようと決意し、記憶を失ったふりをしてゆっくりと村人の輪に入って行く……。

演出家からのメッセージ

栗山民也

井上ひさしさんの戯曲を演出するということは、深く多層的な人間の歴史に、しっかりと正面から向き合うような体験なのです。

すでに舞台で何度か観ていたはずのこの『雨』という作品も、改めてその戯曲を読み返してみると、その豊饒なる言葉の力に広い海のなかに一人投げ出されたかのような、茫然自失といった状態に晒されます。巧妙に仕掛けられた太い構造にがっしりと支えられたその物語は、両国橋から山形へと続く道を歩みながら、一つ一つ発せられる言葉の豊かな「音」を伴って、予期せぬ展開のスピードで縦横無尽に拡がっていきます。そして、自分の言葉を失った人間の物語であるその言葉の旅は、雨の一筋の線のように、死へと天から地面に直線的に叩きつけるラストシーンで終わります。まったく、一瞬たりとも気を許すことの出来ない道程なのです。

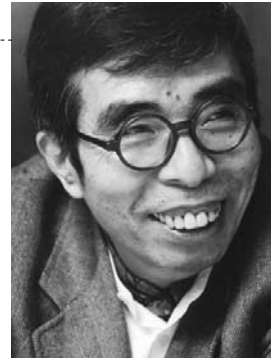
愉快に、しかも残酷に、この溢れ出る言葉の海と正面からぶつかり合うしかありません。ならば、その物語の迷宮のなかで、俳優たちと思いっきり真剣に遊んでみようと思っています。

雨

井上ひさし

Inoue Hisashi

1934年生まれ。60年、上智大学卒業。放送作家として『ひょっこりひょうたん島』（共作）、小説に『手鎖心中』『吉里吉里人』『四千万歩の男』『東京セブンローズ』『イソップ株式会社』ほか、エッセイも含め、著書多数。戯曲に『日本人のへそ』『藪原検校』『小林一茶』『頭痛肩こり樋口一葉』『きらめく星座』『黙阿弥オペラ』『紙屋町さくらホテル』『夢の裂け目』『夢の泪』『夢の痂』『太鼓たたいて笛ふいて』『兄おとうと』『円生と志ん生』『箱根強羅ホテル』『ロマンス』『私はだれでしょう』『ムサシ』『組曲虐殺』まで傑作数知れず。87年、蔵書を故郷山形県川西町に寄贈し、図書館「遅筆堂文庫」が開館。同文庫を拠点に88年より「生活者大学校」を開校している。直木賞、岸田國土戯曲賞、紀伊國屋演劇賞、読売文学賞、菊池寛賞、朝日賞ほか受賞多数。



栗山民也

Kuriyama Tamiya

早稲田大学文学部演劇科卒業。主な演出作品に、『ゴドーを待ちながら』『阿国』『獅子を飼う』『GHETTO / ゲッター』『海の沸点』『エヴァ、帰りのない旅』『太鼓たたいて笛ふいて』『マリー・アントワネット』『私はだれでしょう』『ロマンス』『かもめ』『闇に咲く花』『赤い城 黒い砂』『きらめく星座』『BLACK BIRD』『炎の人』『組曲虐殺』『海をゆく者』などがある。紀伊國屋演劇賞、読売演劇大賞最優秀演出家賞、芸術選奨文部大臣新人賞、毎日芸術賞第1回千田是也賞、第1回朝日舞台芸術賞などを受賞。新国立劇場では『今宵限りは……』『ブッダ』『キーン』『夜への長い旅路』『欲望という名の電車』『ピカドン・キジムナー』『夢の裂け目』『ワーニャおじさん』『櫻の園』『浮標』『夢の泪』『涙の谷、銀河の丘』『世阿彌』『胎内』『喪服の似合うエレクトラ』『箱根強羅ホテル』『母・胆っ玉とその子供たち』『夢の痂』『CLEANSKINS / きれいな肌』『氷屋来たる』『まほろば』、オペラ『夕鶴』『蝶々夫人』を演出。新国立劇場演劇前芸術監督、現在、新国立劇場演劇研修所所長。